はじめに

私は海外調査を1992年からケニア山で始め、その後、アンデスやタンザニアのキリマンジャロ、エチオピアのラスダシャン山で行ない、それらの調査のときの出来事を綴った紀行文を、1996年4月から1997年3月まで、『月刊地理』（古今書院）に「ひとりぼっちの海外調査」というタイトルで連載した。それは、初めての海外調査に1人で出かけ、いろいろ苦労しながら調査した様子を書き記したものである。また、文部科学省の在外研究で、1999年10月から2000年7月までの10ヶ月間、ドイツのレーゲンスブルク大学で研究生活を送ることができた。海外で研究生活を送るというこの体験は、私にはとても新鮮で刺激的なものだった。この経験を、2000年4月から2001年3月まで、再び『月刊地理』に「続ひとりぼっちの海外調査（ひとりぼっ

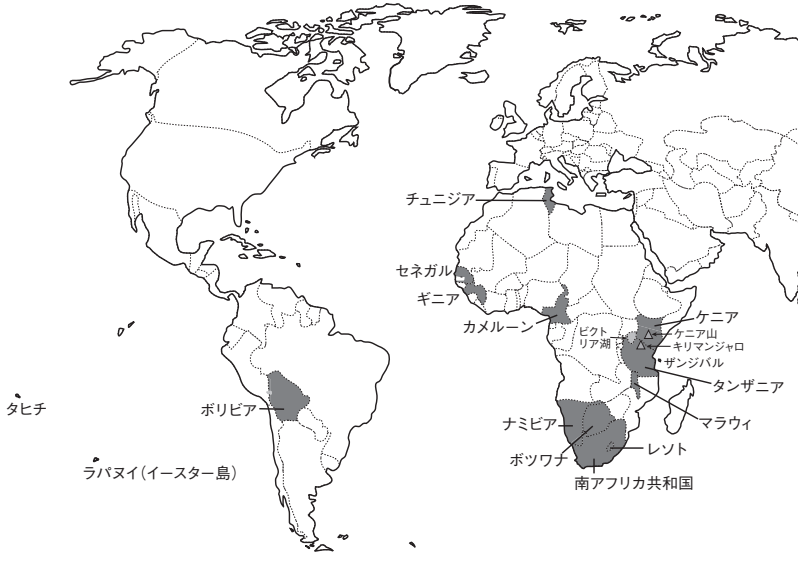

図 0-1　本書で取り上げる筆者が調査・研究で訪れた国

ちの在外研究―ｉｎレーゲンスブルク）」と題して連載した。これらの連載は読者による選出の賞で1位を獲るなど好評を得て、書いてよかったと思った。しかし、それらは雑誌の連載なのでまとめて読むことができない。そこで、この『月刊地理』の一連の連載をまとめようと考え、２００５年に『ひとりぼっちの海外調査』（文芸社）を出版し、おかげさまで好評を博した。

専門書を読むと、いろいろな人がたゆまぬ調査を行なった結果が示されていて、勉強になるのだが、その調査を行なったときは、どんな状況だったのだろ

うか？　どんな大変なことがあったのだろうか？　どんな楽しいことがあったのだろうか？　といった疑問には答えてくれない。そんな中で『ひとりぼっちの海外調査』はそれを示した本であると考え、読者の方々には違った新鮮さを持って読んでいただけたのではないかと想像する。

本の出版から15年余り、『月刊地理』の最初の連載から25年余りが経ち、その『ひとりぼっちの海外調査』が２０２３年２月に長い時を経て、『地理学者、発見と出会いをもとめて世界を行く！』（ちくま文庫）と改題されて文庫化された。文庫本は、統計データ等を最新のものにしたりして少し書き改め、そのときの研究成果と、その後ケニアやタンザニア、エチオピアがどのように変わったのかを書き加えたものである。

そして本書は、その『ひとりぼっちの海外調査』以降の海外調査について書き記したものである。どんな機会を持ってどんなところで調査したのか、どういう手法を使って調査したのか、つらいことや楽しいことも含めて悪戦苦闘しながら調査したことや、その調査から導き出された研究成果を綴ろうと考えた。地理学者が世界中を旅して遭遇した様々な体験を、地理学的知見を交えて綴るエッセイ風「実録・フィールドワーク」の書である。

筆者は１９９６年11月に、京都大学の大学院人間環境学研究科アフリカ地域研究専攻に助教授として就職した。１９９８年４月には、新たに発足した大学院アジア・アフリカ地域研究研究科に、アフリカ地域研究専攻は移った。そのため本書の内容は、京大に就職して数年後から

始まっている。

これから海外調査をしようと考えている若い人たちはもちろんのこと、海外調査を通じて多くの人たちに、その楽しさを伝えられれば幸いである。

水野一晴